
ある日のサバイバル

山口樹懶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日のサバイバル

【Nコード】

N0411I

【作者名】

山口樹懶

【あらすじ】

ある日の、ちよつと変わった銃撃戦。

残り時間は五分ほどになった。

誰もいない、車も走らない森の中。

僕は敵と、アサルトライフルで撃ちあっている。

仲間は全員死んだ。それは敵も同じ。

たった一人の敵は最終攻勢に転じた。

敵は急速にこちらに近づいているらしい。次第に草を分け入る足音が近づいていく。僕は逃げ続ける。

敵が何やら暴言を吐いてきた。僕にそれを聞き取る気はまるでないというのに。

たった一人といっても、こちらにも味方はいない。一対一。

ある理由があつて、お互い作戦は簡単に読める。

戦術も何もないつまらない戦い、体力の競り合い。

突然可愛らしい女声が、ワーグナーの『ワルキューレの騎行』を鼻歌で歌い始めた。

ふんふふーふー

ふんふふーふー

ふんふふーふー

ふんふふーん、

実に脱力感あふれる鼻歌。

正直ウザい。

しかも女子高生の声でクラシックとはかなり無理がある。

まず、『ワルキューレの騎行』と言われて即座にメロディを口ずさむことができる人は大人でも数少ないだろう。

何々のCMの曲、とか言えば、誰でも「あれかー！」と言うのに。マックとカップヌードルとか。

メロディは誰でも知っているはず。

戦争映画好きなら『地獄の黙示録』のワンシーンが頭に浮かぶと

思う。

だけど、一端の戦争映画好きを自称する僕でさえ、「地獄の黙示録 ヘリコプター」とネットで検索をかけるまでは曲名も知らなかった。

——そんなクラシックを敵は口ずさみながら、戦っている。

そのメロディが怖いのか、その声が可愛いのか、自分でもよくわからない。

変な空気にはさすがにこちらも威圧される。空気を読みきれない。岩や木、草むらといった隠れ場所まで走っては隠れ、また走った。

そのたび僕は息を切らす。心拍数が自然に上がっていく。

その時、僕は後ろを向いたところにある倒木の向こう側を警戒していた。

その時、ワルキューレの二回目のメロディが流れ始めたところだった。敵は倒木の陰からひょこん、と姿を現した。

僕は啞然としていた。顔の全てを覆うマスクの裏で、ぽかんと口を開いてしまった。

この状況では頭を狙われて瞬殺ということになりかねない。

まあ、どこを撃たれても瞬殺だけど。

ライフルの銃口を前方に向けたまま、すぐに五歩下がった。

……敵が僕に銃を向けた。

このままでは撃たれる。そう思い、僕は十歩ほど右に走ろうとした。視線は敵に向けたまま。

決意して、右手親指で銃の安全装置を安全から連射に切り替えた。

疲れた足に力を込めて走り出す。と、同時に右手人差し指で引き金を絞り、撃つ。

一発、二発、三発――。

手の内のコルトM4A1ライフルが弾丸を吐き出す。静かにこのライフルは銃弾を撃ち出す。

興奮していて射撃音は聞こえない。

「……当たれ……」息を切らしながらも知らない間につぶやいていた。

ふと弾道に見入ってしまった。二十発程度撃った。

一発も当たらない。最低の命中率だ。

正確に撃て、僕。残りは約十発。

安全装置のレバーを単発に切り替えて、僕はまたM4を撃ち始めた。リズミカルに、テンポよく、メトロノームのように指で引き金を叩いた。

撃つ、撃つ、撃つ、撃つ、撃つ。

当たらない。

無理。単発でも構えが安定しない。

僕は明らかに焦っている。

敵は倒木の陰にまた飛び込んだ。

敵も焦っているらしい。敵はL96狙撃銃のボルトを急いで操作して弾を込め、物陰から身を乗り出して僕に向けた。

その瞬間、敵に都合よく、M4が弾切れしてしまった。

……弾の数はばれていたか。

その好機を見逃さず、僕を殺そうかとするようにワルキューレが止まった。

周りの風景がスローモーションのように遅く再生される。

弾切れしたM4に新たな弾倉を装着する。

敵が肩にしっかりと銃を抱き込んでL96の引き金を引く。

そのとき、僕が胸に弾を受ける。痛い。とても痛い。
戦闘服の表面が鞭で打たれたようだった。
痛かったからいいものを……敵はもう一発撃ってきた。

僕の周りが動脈血の真紅に染まる。
紅に染まった僕を慰める者はもういない。

——ということもなく。僕は電動のエアガンを片手に手を挙げた。
笛が鳴り、彼女は勝った。
どうしてだろう。彼女に勝てない。僕が教えたこの世界に、彼女は深く入り込んでしまったらしい。
でも、彼女にBB弾で殴られ続けるのが楽しい今日この頃だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0411i/>

ある日のサバイバル

2010年11月9日15時57分発行